様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２７ 年　 ６ 月　 ４ 日現在

機関番号：１３５０１
研究種目：若手研究(B)
研究期間：2012～2014
課題番号：２４７３０７２９

研究課題名（和文）多様な感覚の働きに基づく意味生成の学びの実現を目指す美術教育の理論的・実践的研究

研究課題名（英文）Theoretical and practical study of art education based on the workings of the various senses

研究代表者
新野　貴則（NIINO, Takanori）

山梨大学・総合研究部・准教授

研究者番号：６０３５３３８０

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,800,000円

研究成果の概要（和文）：図画工作科・美術科教育の学習活動における感覚の働きに焦点を当て、子供の学びの論理を構築すること、および、題材開発の視点を提示することが本論の目的である。研究を進めるにあたっては、理論的研究及び実践的研究の両面からアプローチした。その結果、新たな意味を創造的に表していく活動の実現を目指すためには、感覚の働きにおける知覚とそれ以外の働き、そして、記憶の働きに焦点を当てることの重要性が明らかになった。

研究成果の概要（英文）：One of the study purposes is to build logic of child's learning. Another is to show the angle of the class development based on this logic. In the case, I paid attention to the workings of the sense by a learning activity of art education. I approached the study purpose from theory and practice. As a result, it became clear that I have to pay attention to several elements for child's creation activity. That’s the function of the sense, the difference between the perception and the feeling, the function of the memory.

研究分野：図画工作科・美術科教育学

キーワード：図画工作　美術　意味生成　感覚　題材開発

１．研究開始当初の背景

学校教育において、カリキュラム開発は継続的な課題であり、この一助となるよう図画工作・美術教育のカリキュラム開発に関する研究を行ってきた（科学研究費補助金による研究としては 2003 年度～2005 年度の「芸術にかかわる教科等のカリキュラム開発に関する基礎的研究」、2006 年度～2008 年度「子どもの意味産出行為の分析による芸術教育のカリキュラム開発に関する研究」、2009 年度～2011 年度「感覚の働きによる意味生成としての学びの実現を目指す美術教育のカリキュラム開発研究」がある）。その際、子どもの学びを意味生成の行為としてとらえ、子どもの主体的な学びの実現を継続的な課題としてきた。

意味生成とは、意味体系の解体＝再構築のことであり、もともとは言語学で用いられてきた用語である。そして、図画工作・美術教育における意味生成としての学びとは、子ども自身が自らの感覚を働かせながら主体的に意味や価値を紡ぎだしていく学びのことを指す。

これまで、実践的研究、及び、理論的研究の両面からアプローチし、いくつかのカリキュラム開発の視点を提示してきた。活動する場の状況などからつくるものを発想し、様々な工夫をしながらつくり、つくったものからさらに発想を広げて活動を展開させる子どもの学びの活動を分析しつつ、その論理を構築した。この成果を論文にまとめ、意味生成の学びの論理を示し、発達段階を踏まえカリキュラム開発の基本的な方向性を示すことができた。

２．研究の目的

これまでの研究から、図画工作・美術教育において意味生成としての学びを実現するためには、感覚の働きが一つの原動力になることが明らかになり、これに基づいて、カリキュラム開発の基本的な方向性を示すことができた。しかし、具体的に題材開発する際の視点を示すことができず、課題として残っていた。

また、教育実践の場では、従来から子どもの感覚の働きに着目されてきた。図画工作・美術において視覚的感覚、触覚的感覚の働きが重要であることは言うまでもない。ここで着目するのは、聴覚的感覚、嗅覚的感覚等、造形活動に直接関係しないようにみえる感覚要素も、子どもの造形活動を活発に、創造的にすることである。このことは経験を積んだ教員の間ではよく知られ、実践されてきている。例えば、木材を使った題材では、木の匂いを嗅ぎ、木と木をぶつけて音を出すなどして材料の性質を感じてから造形活動に入らせるというように。こういった方法は教員が経験から得たものであり、論理化されたものではない。

そこで、多様な感覚の働きが意味生成の実現にいかにかかわるか論理化するとともに、感覚対象である材料等の特徴を整理・分析し、題材開発に活用できる視点を提示することを目指すこととした。

ところで、平成 20（2008）年 3 月の学習指導要領の改訂において、注目すべき図画工作科、美術科の改訂の特徴に〔共通事項〕の新設があげられる。〔共通事項〕とは、どのような学習活動においても常に働かせて欲しい資質や能力を示したものである。具体的には「自分の感覚や活動を通して、形や色などをとらえること」と示されており、子ども自身の感覚の働きを重視することが明示された。

これに応じて教育実践の場では、子どもが自分自身の感覚を働かせて表現や鑑賞の活動をすることのできる授業をめざし、実践的試みが行われつつある。ただし、感覚の働きには曖昧な側面が多く、具体的にどのように何を重視して実践すれば子どもの学びにとって有効かは、必ずしも明確にはなっていない。この視点も考慮し、研究を進めるものとした。

したがって、研究期間内に明らかにすることは大きく二つである。

(1) 子どもの感覚の働きに焦点を当て、意味生成を実現する学びの論理を明らかにすることである。これは継続的に取り組んできたことではあるが、聴覚や嗅覚、体性感覚等の諸感覚との関係については触れてこなかった。また、このことは同時に学びを突き動かす原動力のようなものを子ども自身の感覚におくことになる。したがって、おのずと主体的な学習活動の実現を目指す論理も導かれることになる。したがって、諸感覚の働き及び主体的な学びの機制を論理化し明らかにすることを目指すものとする。なお、これを「研究課題 A」とする。

(2) 次に、意味生成の実現に結びつく感覚対象として材料や用具をとらえ、整理することで、これら有効に活用することのできる具体的な題材（単元）開発の視点を提示する。これを「研究課題 B」とする。

３．研究の方法

本研究では目的の実現に向けて、理論的研究・実践的研究の両面からアプローチする。そこで、二つの研究課題を設定し、相互に関連付けながら研究を進めておくこととする。それぞれを研究課題 A、研究課題 B とし、下記のように課題を設定する。

研究課題 A：理論的研究によって、子どもの諸感覚の多様な働きに焦点を当て、意味生成の学びの論理を

構築すること。または、図画工作科、美術科教育における主体的な学びの機制の論理を構築すること。

研究課題 B：実践的研究を進めることによって、子どもの学習活動のきっかけとなる材料や用具等を感覚対象としてとらえ、それらの特徴等を整理する。そして、授業実践を通し、特徴を生かすことのできる題材開発の視点を提示すること。

基本的に、研究課題 A と研究課題 B は同時並行的に行うものとする。常に理論的研究と教育実践との結びつきを確保するためである。ただし、初年度は研究課題 A を重視し、徐々に研究課題 B に重点を移していく。なぜならば、研究課題 A の結論が研究課題 B に取り組む前提にもなるからである。

研究課題 A については、視覚や触覚以外の諸感覚も含め、多様な感覚が、図画工作・美術教育における子どもの意味生成としての学びにおいていかに働くかをこれまでの研究成果を基礎にして考察する。考察は、子どもの様々な感覚の働きに焦点を当てた文献研究が主となる。

感覚の働きについては、これまでアンリ・ベルクソンの感覚に関する論考を手がかりに感覚‐運動の関係について考察を進めてきた。ただ、ベルクソンにおいては、具体的な感覚器官の働きに焦点は当てられていない。とはいえ、生理学的な考察を行うわけではないので、それぞれの感覚器官の働きを詳細に検討する必要はない。むしろ、感覚器官相互の関係に焦点を当てる必要がある。そこで中村雄二郎をはじめとする「共通感覚」または「共感覚」に関する諸論を参照しながら考察を展開することが考えられる。もしくは、モーリス・メルロ=ポンティや市川浩などの身体論に焦点を当てることも考えられる。

いずれにしても、最終的には、研究課題 B の成果も踏まえて、感覚の働きに焦点を当てた意味生成の論理を構築しなければならない。その際には実践化に具体的に結びつけられるように注意して論を展開するものとする。

研究課題 B については、まずは、予備的な分析・調査を実施する。その上で、教育実践の場で実際に用いられる材料や用具を可能な限り揃え、それらの感覚対象としての特徴を整理し図版付きのデータベースを作成する。

なお作成の際には、感覚にはあいまいな要素が多々あるので、感覚対象としての特徴をとらえるために協力者との協議を行うことによって妥当性を高めることとする。さらに、データベースを基にマトリックス表を作成し、これを基に、育もうとする資質や能力との関係から授業で用いる材料や道具等の条件を導き出す。

その上で授業を行い、VTR 等に記録し、分析する。どのような感覚が働いているのかはもちろん、正確にとらえることはできない。そこで、子どもの発話や行為、活動の展開の仕方などから分析を進めるものとする。つまり、フィールドワークや会話分析等の質的研究の方法を参照することにする。特に、図画工作・美術科の実践においては、子どもの発話や会話も重要であるが、手や目の動き、活動内容の展開の仕方などが重視されるので、行為や行動の分析にも焦点を当てられるよう工夫する。この方法についてはすでに検討したものがあるので、これを参照し、授業実践を分析し、題材設定の方法を評価、改善していく。これらを複数回繰り返すことで、マトリックス表や表から題材で用いる材料や道具等の条件の導き出し方を検討し、有効なものにすることを目指す。

なお、授業実践は、題材を設定してすぐさま小・中学校で行うのではなく、予備的に大学生を対象にして実験的に行うことを前提とする。材料や道具から感覚されることと活動との関係について学生へインタビュー調査し、その結果に基づいて自己評価を行うためである。

４．研究成果

上記の研究目的及び研究方法に基づき、研究課題 A 及び研究課題 B について、それぞれ研究を行った。

研究課題 A については、図画工作・美術教育の実践の場において、子どもの創造的な行為と諸感覚の働きの関係を論理的に明らかにすることを目指し、文献研究を通して考察を進めた。その結果、新たな課題が浮かび上がった。それは、諸感覚の働きの関係について検討するためにまず、言語と諸感覚との関係を明確にしなければならないということである。身体の諸感覚の働きは言語によって歪められ、または、つくりかえられているためである。

さらに、諸感覚の働きと知覚の働きを区別する必要が明らかになった。知覚の働きは言語と結びつき、意味世界を安定化する傾向にあるからである。意味世界が安定化するということは、創造的な可能性が狭められるということでもある。したがって、知覚とは異なる感覚の働きに焦点を当てる必要がある。これは例えば、ベルクソンによって感情的感覚と呼ばれたものに相当すると考えられる。

そして、感覚によって得られたものは、当然のことではあるが、記憶として潜在化することになる。したがって、記憶の機制（本研究では、生理的な視点からではなく、哲学的な視点からアプローチする。したがって、時間の論理としてアプローチすることになる。）にも焦点を当てなければならない。

記憶は大きく二つに分けることができ、一つは繰り返し学習することによって、運動図式として身体に染みついた記憶であり、もう一つは想起されることによってはじめて現働化することのできる記憶である。

前者については、基本的に身体に染み込んでいるのであるから、それを想起し、現働化するために特別な努力を必要としない。つまり、この場合の感覚の記憶が現働化するということは、習慣的なものとして働くことになる。注目すべきは、後者の方であり、ベルクソンのいう感情的感覚が潜在化される。この感覚-記憶が現働化するということは、身体に染み込んだ慣習的な知覚構造とは異なる仕方で実現されることになる。つまり、言語（これも慣習的な記憶として構造化されている）や知覚構造をつくりかえ、子どもの意味世界に隙間やずれをもたらすことに結びつくものとなりうる。子ども自身が、知覚化されないものも含めて自らの感覚を働かせ、この潜在化したものを現働化することによって、子どもの創造的な表現活動を導き出すことができると考えられる。

したがって、授業実践において検討しなければならないのは、知覚構造を乗り越えたところの感覚を子どもが発揮できるようにする工夫である。

研究課題Aで得られた成果を踏まえて、研究課題Bについては、子どもの諸感覚に働きかける材料や用具、題材を工夫した予備的な研究実践を行い、予想に基づいた成果をある程度見いだすことができた。研究実践は、大学での授業、教員研修会、造形ワークショップ等で行った。実際に子どもを対象としたのはワークショップのみであるが、子どもであろうと大人であろうと、諸感覚に作用する材料等を工夫することで、表現活動に広がりや豊かさがもたらされ、およそ予測された成果を得ることができた。この場合の工夫とは、材料そのものの選択よりも、その材料とどのようにふれあい、活動をするかに焦点があてられる。

例えば、同じ材料であったとしても、材料を提示しすぐに表現活動に入る場合と、具体的な表現活動に入る前に、十分に材料とふれあい、その特徴をとらえさせるのでは、表現活動の展開に違いが生まれる。つまり、材料や用具の感覚に働きかける諸特徴を生かすためには、題材への生かし方、展開においてどのように生かすかが重要であることが明らかになったといえる。

これら研究課題A及び研究課題Bの結果を踏まえるならば、題材開発の視点を構築するためには、子どもの感覚の働きのみならず、言語やイメージ、記憶との関係性を踏まえなければならないことが明らかになった。その上で、子どもが創造的に学びを実現する場合の学習主体のイメージモデルということのできる子どものあり様を想定することが、子どもの創造的な学習活動を実現する題材開発に有効な手段の一つであるといえた。このイメージモデル構築の試みは、既に学会論文として発表した。その際には、教師によって期待される学びの主体のイメージと状況に応じて生成変化する主体のイメージの二つの対照的なイメージモデルを措定し，それぞれについて検討した。

さらに、現在、この研究成果を基礎として題材開発のための視点を提示するために、造形表現活動における学習主体のイメージをより詳細に検討し、子どもの描画の発達段階論も考察の対象に加えながら、創造的な学習活動のための基礎理論を構築する論文を執筆中であり、平成 27 年度の夏に学会誌に投稿できるよう準備を進めている。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕（計　1　件）

①新野貴則「図画工作科・美術科教育における主体的な学びに関する考察 ―学びの主体のイメージモデル構築のための試論―」『美術教育学(第 35 号)』(査読有)2014.3, pp.283-294

６．研究組織

(1)研究代表者

新野　貴則（NIINO,　Takanori）
山梨大学・総合研究部・准教授
研究者番号：60353380